

あを

8

2013



私は仮面が支配する
ひとりぼっちの世界に
喜んで自らを閉じこめる

ジェームズ・アンソール



Ensor
アンソール
骸骨にされた私の肖像

ファブリ世界名画集
平凡社版より

あそ

八月



舟 蟲 佐藤 喜孝

舟蟲が海をあがりぬ道に上りぬ

舟蟲の前後わからず日の高し

舟蟲をほろへるやうに立ちあがる

大夕焼下のくらみに魚籠の水

贗物の円空わらふ臀帖かな

雪國は佐藤さんかな蟒草

家毀つ梅雨の日確と中天に

結婚式は神前だったがそれ以後神仏を拝んだことはない、とおもふ。自分のことなのにおもふとはあやふやだが、何処かで頭を下げてゐるかも知れない……。

子どもの頃はよくおまもりを持たされた。六年生の夏休、父方の祖母がゐる秋田へ行った。よそつたご飯がたちまち蠅で黒くなつてしまひ驚いた。ある時、外厠でお守を落してしまつた。祖母が拾ひ上げてくれ綺麗に洗ひ持たせてくれた。顔は忘れた祖母だがこのことは今でも覚えてゐる。お陰で罰が当り帰つて来たら盲腸になつてしまつた。三歳の時の麻疹とこの盲腸の他病氣と云へば風邪ぐらいである。姉弟の中で一番ひ弱であつた私が元気に暮らしてゐるのは不思議である。近頃身辺に不幸が続く。神仏に出会ふと貧者の一燈を投入れ家内や友人のことを頼んでゐる。

☆

吉成美代子

シャンデリア灯して暗く夏館
咲かぬ薔薇思ひ切りよく鋸で
実となりてしだれて重し姫林檎
涼しさや裾タワーの灯ひろがり
秋の蚊の翅音枕の後ろから
七十はもうすぐですよ著莪の花

☆

吉弘恭子

にげゆくとおもふ泰山木の白
静けさの中中で待つ蒼かな
あぢさゐや日向日蔭を咲きていま
隠れなき富士のお山に梅雨しとど
魚の目も行くか戦に夏はじめ
腸が口から夏の鴉かな
両の手でなまあたたかき蚊をはさむ



ぶらりコンサート

赤座典子

焼畑の煙車内に梅雨の明

日盛や蛸螭めける在来線

十階の風に風鈴鳴止まず

山の峰厚くなぞれる雲の峰

やるせなき歌声に酔ふ夏の宵

羅に刺すバンジョーの金属音

淡々と百二回目の夏受入れて

☆

井上石動

深峪を揚がる川風青葉かな

大月の山全山の滴れり

雲湧くを吞みつつ見遣り夕端居

藪つ蚊の待つてゐたかと攻めにけり

ふんじゃあね振り手小躍る夕焼なか

葉洩日の淋漓と降りぬハンモック

夕焼雲伊豫が熟田津風にけり

昨年十二月、国から町興しの補助金を受けて、湯沢町の店主等有志が「お休み処ぶらり」を開設した。

地域の観光情報の紹介の他、コシヒカリを始め、特産品やゆかりの作家の陶芸作品も展示・販売されている。囲炉裏のあるカフェも併設されていて、御当地銘菓セットもある

先日は、飲み物付きのジャズコンサートが開かれた。トランペット、キーボード、女性ボーカルに加え、バンジョーが参加。海外でも高い評価を受けているという奏者で、ウエスタンで聞くゆつたりとした奏法とは大違いの、素晴らしい技術を駆使したものであった。約七十人の満員の聴衆が、三時間を大いに楽しんだ。越後湯沢温泉に新名所出現?! お出での節は是非お立寄り下さい!

きけりつぬたりり

6月号「能登だより」で、ホトトギス句群に『いわゆる過去の助動詞「し」が多用され、もちろん過去の意は一切ない。(中略)文語の調べが欲しいための使用だから理解はしますが鼻につく。』と定梶さん。私も同感。この用法は子規さんからもう始まっているので、りっぱな「純然ホトトギスお流儀」なのだろう。

句歴初年目に「吾が舞ふ写真出で来たかしの忌」(公表恥ずかし)を作ったすぐ、『旧かなを楽しむ 荻野貞樹』を読み、冷汗百斗。以降私の句から「き句」は激減。それ以降いつも念頭に在り、サッカー日本代表に対し「選ばれしイレブン」など聞くと「ハ選ばれたるゝだろっ?」などとツツブツ……………。

でも「新涼やはらりと取れし本の帯 長谷川權」などを見ると、別にもう「ホトトギスご用達用法」ではないのかも。『臨時ニュースを申し上げます。帝国陸海軍は今八日未明、西太平洋に於いて米英軍と戦闘状態に入りし。(大本営)』とは放送はされなかった。放送は「入れり」だった。こと語法に関してだけは、大本営はしっかりしていた?

春惜しむ

大日向幸江

噴水に街逆さまに写りけり

小満や娘に母となる兆し

赤鳥居八本までの木下闇

縁側に大の字に寝て春惜しむ

お多幸に人の入りゆく荷風の忌

浅蜷取り潮満ちてくる帰らうか

ストローを螺旋に上るソーダ水

蜘蛛の囿

木村茂登子

あぢさゐを剪る衰への見えぬ間に

菖蒲田の花みな美しき名をもてる

爪先で探る筍雨後の朝

茗荷汁今さら何の物忘れ

庭隅の緑蔭実生の名を知らず

蜘蛛の囿や好きも嫌いも女偏

葉隠れにみたり蹲踞の雨蛙

大宮氷川様の参道をすすみ赤鳥居のすぐ左手に松尾神社がある。松尾神社は食物神で中でもお酒の神様だ。本宮は京都の松尾神社、飲むことの大好きな私は氷川様より先に松尾神社に頭を下げた。今の私は肝臓を患ってをりお酒を飲むことも少なくなった。松尾神社の裏手に小さな沼があり木下闇の沼には鯉や亀が音も立てずに泳いでいる。わずかに初夏の陽が当る所では亀が甲羅干しをしている。ふと我にかえり急いで氷川様に足を向ける。手水場では宮鴉が滴りを受けているような素振りをしている。夏と春を行ったり来たりの今年は亀も鴉もつかうかとはしてられない。帰り道どこからかカッコーの声が聞えたような感じがした。ゆつくりと私も歩き、季節もゆつくりと進むだろう。

「便利屋コーナー 無理して骨折等の事故を起さないために身近なところで気軽に手伝ってもらえるコーナーです。掃除・庭木の枝切り・ペンキ塗り・簡単な日曜大工等々。」

こんなチラシを近所の方から見せられたのは何年も前のことだった。

その折は余り気にもとめていなかったが、近頃八十の坂を越え、一人暮らしをしていると家事が億劫に感ずるようになり、このチラシのことを思い出し気になっていた庭木の枝を払ってもらいたく電話してみた。

「三三曰してkさんが来てくれて繁りすぎた庭木の枝を一時間程で綺麗に払ってくれた。必要な道具はすべて持参して後片付けした上で払った枝も持って帰ってくれたのである。」

自分でした時は半日がかりであったが、またたく間にと云って良い程の手際の良さで、つくづく頼んでよかったと思った。帰り際、「無理しないで何でも気軽に声をかけて下さい」と云ってくれた。

一時間の料金も明示されており決して高くない。こうした人が近くに居てくれることは本当に有難いことと思った。

私の近所でも一人暮らしの高齢者が増加しつつあるらしい。「元気で長生きしようヨ。」を目標に住みなれた地域でのふれあいの一環として半ばボランティアのこうした組織のあることは高齢者にとって心強い味方である。

☆

齊藤裕子

実梅挽ぐまだ三つ四つは葉隠れに
初々しリクルート娘の白き衿
青柿やアルルカンの衿立てて
ネット見て母に尋ねて辣蕒漬
初夏の川いつの遅れる子鴨一羽
箱入りのオオムラサキ群れ深大寺

A

篠田純子

出奔の蠨Aの浮游かな
夏椿黄昏泣きの保育園
きっかけの青いカクテル夏の雨
唐突にみぎむけ右の夏颱風
酸漿の花の白さや愛宕山
荒梅雨トトロのバスの来るやうな
白シャツの中学生の楽屋入り

母が、やっと使い始めた携帯電話をかけてきた。同居している弟が、これから加世田のバラ園を見に連れて行ってくれるという。「こんな事は初めてだ。」と、とても嬉しそうだった。確かに優しい弟だが母を何処かに連れて行くなんて事は初耳だった。有難いと思うと同時に、ちよつと不安な気持ちにもなった。最近電話をしても、母の応対に根気がなくなってきた気がしていた。車の運転はしても、足が痛くて散歩はしなくなったらしい。想像以上に一年の月日は、88才の母に大きな変化をもたらしているのだと感じた。

様子を見に帰ろう。飛行機の手配をした。母と弟、主人、私で一泊の国民宿舎を予約した。そして今度は私が母の携帯にお電話をした。

四月から仕事の地区が変わり、主に芝・新橋・虎ノ門を回っている。芝から虎ノ門へ行く時に、愛宕のトンネルをよく通るようになった、雨の日は傘をすばめて一息つけるし、照る日はひんやり涼しく、ホッとする。ある日トンネルの辺りに、のぼり旗が沢山立っていて「干日まいり」と書いてある。「ほおずき市」とも書いてある。

六月二十三日に愛宕神社を詣でた。境内は二百人程の列が出来ていて、順番に茅の輪を潜り参拝する。社務所で籠入りのほおずきを買った、「昇殿してお祓いを受けて下さい」とのこと。普段は間近に見られない、馬で出世階段を昇る絵馬（大正時代）や討入りの絵馬を見た。ほおずき市は浅草が有名だが、愛宕の方が古いらしい。

虻の逡巡

定梶じょう

井のふちに鳴く雨蛙井を深み

墓所買ふはさびしきつとめ蛇苺

ででむしの渦の緊張なぬ永く

己が白に恍惚の鷺青田かな

物干しにあまたの軍手奇妙な町

大いなるほうたるあらぬ方にともる

降りんとし虻の逡巡夏薊

☆

須賀敏子

アスパラを立てて運ぶクール便

青鷺の動かぬままにサツパ舟

睡蓮の咲くころあひに宿を出る

橋十二くぐる舟より七変化

大いなる茅の輪潜りて鹿島宮

日光の山のはなやぎ梔の花

メジャーリーグの帽子の届く父の日に

完璧といつていい精度で天気が予報される現代と違って、以前は風を見、雲を見、水平線を見て占うのが普通だった。占う、という言葉は適当ではないかもしれぬ。少なくとも漁師は科学的に天気の変化を知ろうと努めていたものだ。そんな中で無風、曇天の日は海と空との堺が消えて、四字熟語でいう「水天一色」の状態になる。漁師にとり一番天気の予想がつけにくい日だ。かつてそんな時に吟行会があったが、「海と空一つに溶けて」「水平線見えない昼の」、そして拙句「どこ迄が空どこからが海」等々、それぞれ表現に努力苦吟している。他にも熟語として「水天彷彿」「江天一色」などは曇天であろうか。「水天一碧」「一碧万頃」は空と海が青一色になったものの、晴天だろう。王岩さんに伺いたいところだ。

「東京原発」

映画「東京原発」を観た。

二〇〇四年に公開されたがほとんどヒットしなかった。三、一の後、に我々が知った原発の現実がそのまま描かれている。役所広司扮する力リスマ都知事が「東京に原発を誘致する」との発言に諸派の意見が噴出、演技派俳優を使いブラックユーモアで仕上げている。

笑いながらも三、一一で原発事故を経験した我々はズッシリと重い物を感じるだろう。とても上質な娯楽作品になっている。

原発再稼働へ進みつつある今、上映会がありましたら是非行ってみて下さい。

竹内弘子

吊革の生あたたかき風邪心地

恋の眼と風邪のまなこと紛らはし

蛍くさい掌嗅いで別れけり

羅の小さい母を覚えておく

春愁や笑殺せんと思ひしに

葉生姜をかりりと噛むも母のため

田中藤穂

石段を緑に染めて櫨の花

弔問や眞つ盛りなる花石榴

ゼラニウム不発弾処理作業中

金魚草咲かせ定年後の男

くたびれて湯に足をもむ風露草

岩煙草皇女の寺の崖濡れて

踏みくだく気はなかりしを梅雨茸



諏訪神社のお祭は毎月二十七日で、昼頃になると露店を出す人がリヤカーに荷を積んでやってくる。私達は学校が終るとランドセルをおろすとき小遣いをもって飛んでゆく。

ヤキノバやみかん飴は買つてはいけないと母に言われているので、買つのはぬり絵、綿飴、べっこう飴、ママゴト道具等々。それが八月になると例祭が二十六日、二十七日と行われて、特に本祭の時は境内は勿論今の西日暮里駅の横から私の家の前を通つて日暮里駅の方まで露店が並び。境内にはいくつかの見世物小屋も建つ。お祭の半月程前からその木組みが始まつて、だんだんと小屋の形になってゆくのを、ドキドキしながら見ている。(つづく)

溝 浚

長崎桂子

日暈してまたまた暴れ夏の雨

隣人の葬送に立つ青嵐

青葉山下りて来たりし青葉風

若者の手早き処理や溝浚

腰曲が大きく息する溝浚

笑ひ声時時漏れる溝浚

一輪車上手く使へぬ溝浚

梅 雨

早崎泰江

梅雨さなかたつた一人のエレベーター

端々のふるさと訛著莪の花

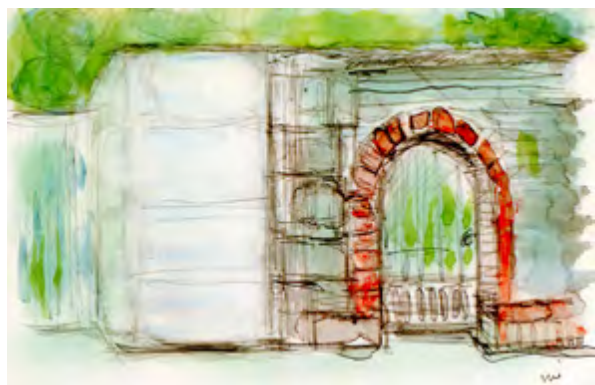
額の花雨に打たれて濃く深く

せはしなく蝶とびかひし梅雨晴間

朝夕に鳩含みなく梅雨曇

玄関の人を迎へる山法師

すくすくと子の育つさま青田中



六月に入っても、五月末からの昼間はぎらぎらと照り付けているのに夜は温度がぐっと下り風の冷たい状態が続いて、背筋がなんとなく寒い感じがする時があり、知人にも不調な人が二、三人いらつしやる。それにしても元気なのはごくだみで、すこし離れて見れば悪臭は気にならないし、曇りがちな日にも白く清潔な花は清清しくて美しい。暫く眺めていて時を過です。

早、梅雨に入り、災害でなくどうか恵みの梅雨でありますようにとお祈りしています。

蛭

森 理 和

緑濃し単線軌道鳥の立つ

わくわくと蛭に合はせ早夕餉

合歡の葉の閉じ初めたる烏賊釣火

梅雨晴れ間道路工事の迂回指示

梅雨のはて斜めななめに障子じわ

一粒に笑みの溢るるさくらんぼ

都議選は死票にならず青葡萄

伊豆急行、伊東駅から七つ目の伊豆大川駅。特急、急行は通過する静かで素朴な駅です。とても気に入って、移住したいとも思う程です。蛭の自生池があり、たまたま今年初めて蛭に出会いました。平日でしたから、蛭の数より人の数にもならず、係の人から丸提灯を一人一人お借りして、池から三十分程下りました。池には沢山蛭がスースーと飛び買い、常に水面が照らし出されていて、小さな蛭の発する明るさに驚かされました。闇にスーと消え、スーと闇から現れ掌にとまったり、たまたま満天の星、提灯を片手に下る道々に蛭がスー。池に群れる蛭もさることながら、スーと草陰からの一匹、二匹の蛭は私の為にと思ひ込めて、特別な体験でした。

七月作品より

篠田純子・長崎桂子・佐藤喜孝

藤の花キリンのぬない動物園

佐藤 喜孝

花十薬丘なす裾に遊水池

森 理和

普通なら、動物園で見た動物を句にするところですが「居ない」キリンを、句にしています。藤の花の揺れ具合が「なーんだ、キリンを見たかったのに……」と拗ねた気分と合っているように思いました。

(純子)

笹舟の水際に寄りぬ押しやりぬ

佐藤 喜孝

葦掴む脱皮のをはりぎんやんま

森 理和

清しい小川が流れ長閑な景が浮びます。小学生の頃お友達と「わいわい」言いながら道草をして、笹舟を流すのに服を濡らしながら一生懸命に土手で取組んでいた自分が甦りました。

(桂子)

YOU TUBEで「ヤゴからトンボへ」を見てみました。頭・背から脱皮しはじめ、仰け反って頑張るがなかなか尾が抜けない。抜けた瞬間にバネのように戻り枝につかまる。抜殻にも手足がありそれもしっかりつかまっている。「頑張れ！」と声を掛けている作者が見えてくるようです。(純子)

東大寺の鴟尾にあつまる五月の陽

吉成美代子

奈良東大寺の大仏殿の鴟尾が輝いています。他の月ではなく「五月」がこの句にピッタリと思います。あつまるといふ表現が、人々が参詣に来ている賑々しさをも表現していると思います。

(純子)

手枕の寝息乱る春の猫

吉弘恭子

作者が毎夜飼う猫に手枕をしていると聞いています。突然夢でも見たのか猫の寝息が乱れます。楽しい夢なのか、戦っている夢なのか、作者の優しいまなざしの感じられる句です。(純子)

大皿のロールキャベツと夏に向ふ

赤座典子

大皿の吟行では、私もロールキャベツを完食しましたが、ちよつと覚悟のいる大きさでした。これを食べて「夏に向ふ」という意気込み。元

気な句と思いました。

炎天へ打って出るべく茶漬飯

川崎 展宏

(純子)

つつましき女人の家も菖蒲の湯

木村茂登子

御年配の方の御自分にとつての一年間の行事の一つでしょうか、五月五日は端午の節句、柏餅を食べ菖蒲で邪鬼をはらう。幼き時からの習慣なのでしょう。

(桂子)

新じゃがの丸ごと皮つき甘辛煮

木村茂登子

新じゃがの煮物のほろ苦い香りを感じました。是非茂登子さんにレシピを教えてくださいたいものです。

(純子)

塗蛙は天下一品お父ちゃん

斉藤裕子

「蛙塗り」という私には絶対に作れない季語を使った句です。とても上手に蛙が出来たのを娘

の作者も得意げに見ています。天下一品という

表現に、今も父親を愛し誇りに思う作者が見えます。

(純子)

アメンボの足に喰ひつく蝌蚪のくち

篠田純子

昆虫もさうだが蛙もオタマジャクシの時代と全く姿を変へてしまふ。子どもの頃の記憶が残って居たら気が変になつてしまふだらう。とこんなことを考へてゐたら、カフカの小説に「変身」があることを思ひ出した。だうも読む気にならない。掲句から離れてしまった。見たこと、観察したことに新鮮に驚いてゐる。この驚くところは若さの秘訣である。

(喜孝)

春深しつゝは借錢でけへんか

定梶じょう

先月は「猫の子になつかる金を借りにきて」の句を採り上げた。

と金を借りる立場の句は枚挙にいとまはないが、金を貸す立場の句は知らない。なぜだらう。

いささかの銭借りてゆきし

石川啄木

わが友の

後姿の肩の雪かな

掲句は湿りがちな内容を表現が支へてゐる。作者の心意気である。そのひとつは「借錢」である。借金とは云はぬ古い云ひ方と「明鏡国語

笹舟の岸に寄りきし押しやりぬ	佐藤喜孝
懐かしき幼稚園なりいぬふぐり	長崎桂子
囀や水平線に船沈む	森理和
星あかりやもりの声の鳴きやまず	吉成美代子
梅の実のふつくら結ぶ家解体	吉弘恭子
古時計気儘に鳴りて春闌ける	赤座典子
あめんぼを跨ぎあめんぼあちら側	井上石動
散りぎはに水鏡せる桜かな	大日向幸江
待たされてゐて若葉風ほしいまま	木村茂登子



げんげ田や蹠ひんやり鬼ごっこ	斉藤裕子
河鹿鳴くなきやみてまたきよきよきよ	篠田純子
寄るべなく曲がつて蜷が道つくる	定梶じょう
露の臺少し刻んでスパゲティ	須賀敏子
梧桐やおかぐらといふ二階建	竹内弘子
朝寝して今日人来るを思ひ出す	田中藤穂
大岡越前の立ちし石階手に温し	吉弘恭子
散るさくら背に銀座の猫走る	〃



縫物を膝から下ろす柿若葉	佐藤喜孝
卯の花や這出て亀の泥塗れ	森理和
バス一台逃したあとのゼラニウム	吉成美代子
恋猫の手鞠のやうに眠りこむ	吉弘恭子
丁石の然と十八椎の花	赤座典子
落ち縁の青道心や柿若葉	井上石動
お國振り土佐は高知の塩かつを	木村茂登子
手の平に小さき蠟細工柿の花	斉藤裕子
アメンボの足に喰ひつく蝌蚪のくち	篠田純子



春深しついでには借錢でけへんか	定梶じょう
新しきミシンを使ふ夏はじめ	須賀敏子
竜の玉いくつ投げてもたよりなき	竹内弘子
萬縁に氣圧されてゐる ^{いのちなが} 寿	田中藤穂
若葉道行けば主役を得たやうな	長崎桂子
団子屋に教師と児童夏の風	田中藤穂
子ら馳けて夏の匂をまき散らす	〃
参道や十八丁の木下闇	〃



火事跡を炎天となり灼けつくす

没落の父の死手作り蕃茄熟れ

父偲ぶ目線を過ぎる鬼蜻蜒

病室白し稚児車^{ちんぐるま}の大群落の中

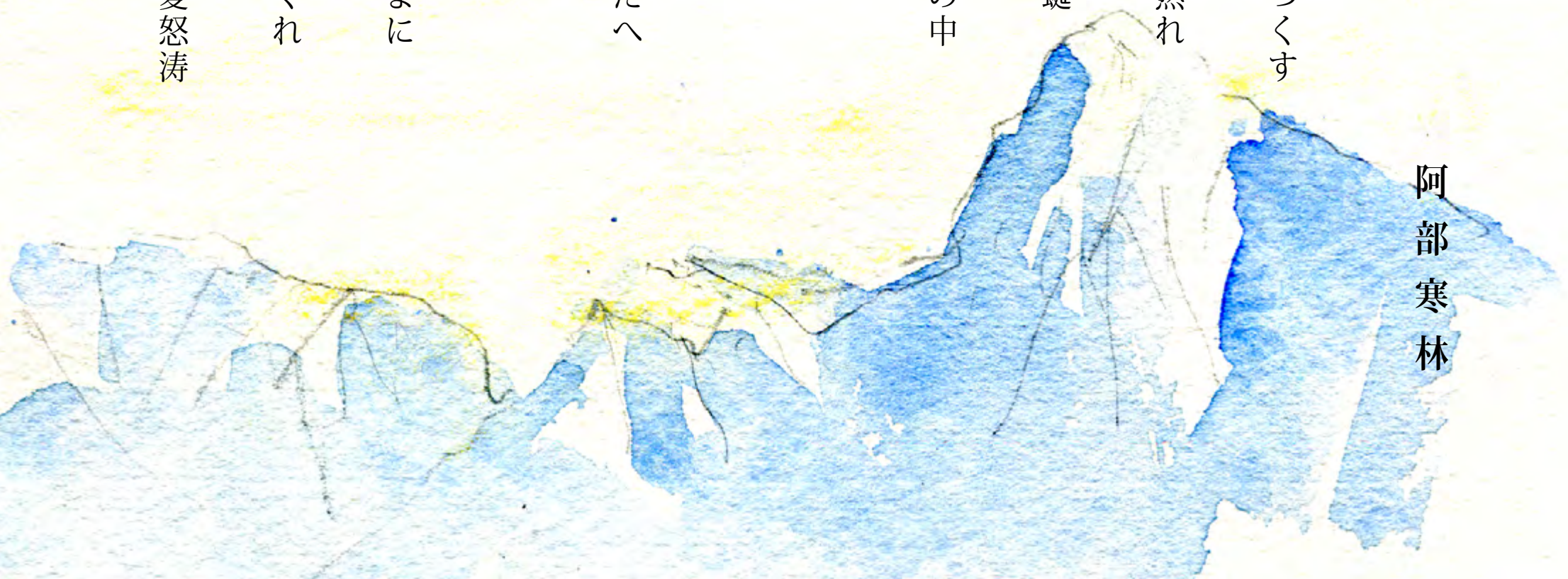
風鈴の音色昭和の風絶へだへ

標識を拾ひ訪ねて木槿垣

雷鳴や余命は天の意のままに

肋なき身を震はせる蟬しぐれ

世のために役立たぬ身や夏怒涛



能登だより (6)

定梶じよう



難しいことは手に余るので今は述べませんが、芭蕉でも当時はそう見られた可能性がありますし、正岡子規しかり。荻原井泉水は一般の俳人に対する影響はさほどなかったでしょうが、定型さえ否定しました。

辞典には、既成の観念や形式にとられないで先進的であることが前衛、と説明されています。

一方、「半島気質」ということがあります。誰でも遣うことばとは言いかねますが、旧態を守ろうとする保守的な気質のこと。どこの半島でもそうであるように、生まれて育った地より知らなかつたら当然はぐくまれる気質です。まして能登は日本海に細く突き出て、いわば島に近い。反動とまではいいませんが、住人が保守的な性格に育つのは当然といっています。

そんな能登にも、多分四十年ほど前から『青玄』や『海程』に投句する人がありました。青玄や海程を前衛誌

俳句に「前衛」ということばを不用意に冠するのは避けたいとおもうけれど、前衛と名づく俳句が現在もつくられていること間違いない、と思うのです。前衛とそうじゃない句の境はどこにあるか、などの

とすることに異論があるかもしれませんが、少くとも『ホトトギス』の傾向とは違う。やっぱり新しい。

陶器の天使が売れた 木枯骨董店 伊丹 公子

そして稲畑汀子さんには

野の果と空の果合ふ鳥雲に

のようないい句があるけれど、我々のレベルの方に組する句ではある。

今ここに『狼』という俳誌があります。句友の句寿夫さんからお借りしたもので、会員十人ほどの同人誌。逢ったことのある方はいませんが、相当古くからあるようで、代表者は加賀の方に住まう方らしい。

螢螢ひとつがついてきてという 大沢 輝一

この句だけみれば既成の傾向の句のようですが、

八月が丁度来ました乗りますか 大沢 輝一

を読んでそうじゃないことがわかります。そして同じ作者の〈螢追いとうとう兄は戻らない〉のような作品には、いわゆる前衛俳句にも月並な型ができあがりつつある、と思ってしまうのです。

その日その日のひらがなのよう昼寝覚

関戸美智子

「その日その日」が難しい措辞で、イメージの繋がりを重視した句作りのようですから、その日その日に遣うひらがな文字のようなやさしさを寝覚めに覚えたと、と一応鑑賞しておきますが、「ひ」の音を重ねて韻きのしなやかさを求めた句なのでしょう。作者の狙いは当たった。ただし、〈桃の日のテール戦後の句いです。〉の「戦後の句いです」は完全に月並み。

啄木忌五円切手を貼りました 関戸美智子

のような句を発表なさる方が、前衛俳句では常套に近

い言いまわしの「戦後の匂いです」を使うのは頂けない。

甲冑の口から謡洩れる首夏

館 百合子

この方は、私の隣町の住人であるらしい。そして、こういう先駆的な俳誌に同人参加している能登人がいることを同慶したいと思います。

ころがりても言いたげな胡桃の実 館 百合子

この句にしても、所謂「前衛俳句」とは言えぬ、真つ当な（語弊のある言い方かもしれませんが）句です。

海からの風存分に干鰯

館 百合子

にしてもそう。しかし、

母あらば紙風船と置き薬

館 百合子

の「母あらば」に既成の句とは違う気配を感じますし、へはやばやと試着室から蝶になるゝなどの譬喩に所謂

前衛固有の軽さをかんじてしまうのです。しかしこの方々にとつてこのような俳句が狙いなのですから、毀誉褒貶、私ごときのいうべきことではないのかもしれませんが。能登にも前衛的な俳句をつくる方がいる、ということに今は満足して。

さて六回にわたりつまらぬ文章につきあつて頂きました。ありがとうございます。

文語と口語の垣根、既存の句とそうじゃない句の垣根、いずれも低くなっていること確か。したがってここは口語調でいこう、ここは前衛風でいこう、など選択する自由がふえて、句作りの愉しみが広がっていると思う。

そのいずれを行くにしても旧かな遣いの範囲内で作つてゆきたい、そう思う昨今です。

△△

豊島園に花火が揚る北病棟

見舞いの方には手元の葡萄の葉書を返事になっている。いつも立秋の頃田舎から葡萄を送ってくる。

本家の立子氏（従姉）分家の武男氏（従弟）で、今年は武男氏から巨峰（種無し）を送ってきた。病室に一房小さな笹に入れて食卓台の上にのせた。そんな訳で二十数年拙いが葡萄を礼状の替りに出してきた。

主治医の寺嶋先生から術後の説明を受けた。胆管は癌であった。

退院したら店を直したいとか、句集を出したいとか、南画を書くなどと欲は深い。癌に負けては居られない。

△二〇〇四・八・七△

暮みてゐるやうでみてゐたり

わが町の市谷亀岡八幡宮祭礼も無時終つた。8月6日～8月8日の3日間で、6日はお神酒所での神輿入魂式。8日は町内月桂寺門前に集合、午後1時に出発。山車を先頭に子供神輿と町内を賑やかに巡行。子供は約60名ぜんたいで130名の長い行列になった。天候にも恵まれ猛暑に備え、冷たいものを用意したり役員の配慮怠りなし。お母さん達が周りから吾子を声援している姿は微笑ましい風景である。この親子の呼応が人間愛の原点であると思う。殊に最近親子関係の面白からぬニュースが流れる中で、斯くあるべしとつくづく感じる。今日は8月15日終戦の日、反省を籠めて鉢洗いを行う。さて、今回、韓国料理の町会員から近く

の役員が「神とは何か」と聞かれたそう。さて、神とは。

△二〇一〇・八・十四△

断崖に白靴を脱いではならぬ

竹内 弘子

昭和六年に『モロッコ』というアメリカ映画あった。ゲリー・クーパーとマリナー・ディートリッヒの共演である。ディートリッヒは、ドイツの俳優だったが、ナチに反対してアメリカで映画の殆どに出演した。『モロッコ』は名作で大いに当時の観客をわかせ、以来いく度も上映されて有名である。筋は、フランスの外人部隊がアフリカ北岸の町モロッコに駐在、討匪作戦をつづける。クーパーの役は遊び人のアメリカの兵士。ディートリッヒはフランスから来た歌手で富豪の紳士に愛される過去をもつ美貌の女。砂漠の町モロッコのエキゾチックな風景と明日をも知れぬ運命に情熱をかける女の姿が描かれている。大きな羽の風扇で二人がキッスをするシーンは不思議と六十年も経っているのに『モロッコ』という映画を思うたびに眼に浮かぶ。この映画はリアルに撮られた映画であるが、最後に砂漠へ出動する兵士を追って、女が履いていた白靴を脱いで砂上に放りながら素足になって、鼓笛隊の軍楽とともに進む。この白靴を砂上に放げられる一瞬から、この映画はフィクションに変わるのである。熱砂の砂漠を女が素足で歩いて行ける訳がない。スタンバードという監督はこの映画を最後の場面、フィクションをもちいるのである。白靴を放げることによって、女の愛の生きざまを見事に象徴して観せた。白靴の存在感を証明するために『モロッコ』の最後のシーンを語ったが、さてこの作品の白靴も実に存在感が強い。断崖に脱いではならないと言って、当然のように、断崖上には白靴が揃って置かれてあるのを読者は想像する。自殺であれ、殺人であれ、危険な情景には違いない。断崖

の持つイメージと白靴。この白靴もやはり女性のものである。

死は私を驚かせない。実際、私自身がいつか死ぬというきわめて明確な意図を持っているからである。
ジョージ・バーナード・ショウ

この断崖の白靴は、生と死を領つ存在なのである。

ふる里の朝市で食ふ今川焼

石森 和子

「味みれよ」朝市の梨みずみずし

朝の市おまけしとくよ疵の梨

東京近県では、梨がよく産れる。多摩川を挟んで登戸の周辺。千葉も梨の産地である。作者のふるさととは千葉の御宿と聞く。その朝市に出かけられたのである。スーパーや店舗で買物をするのとは違って朝市の新鮮な感覚。野菜であれ、果実であれ、曉けに採ったものばかりが野天に並べ売られる。青菜はまだ露に濡れている。トマトも梨も瑞々として食欲をさそって呉れる。今川焼も出ている。トマトや梨やとうもろこし野菜などを売る人はおばさん達であろう。売り手も買い手も気軽に声をかけあっている。梨を剥いて、「味みれよ」というのも朝市である。梨を買えばおまけが付く。愉しき哉ふるさとの朝市である。

(一九九四年九月号)

近江八幡水郷巡り

早崎泰江

手漕ぎ舟迷路のごとく葭茂る

老鶯や葭のはざまに手漕ぎ舟

葭の原分け入る蛇の悠然と

水郷の遠くかすむは淡海かな

淡海に乗り出すかまへ水馬

万緑や憂きこと忘れ舟遊び

風涼し水面をすべる櫓のさばき

武藏野

佐藤喜孝

むさし野は校歌の中に春の富士

むさし野の春を流れてゐたる水

逃水の中にむさし野収りぬ

六月の武藏野の雨垂直に

武藏野を油障子で圍ひたる

武藏野に油絞の音洩す

むさし野の痲硬き夏の果

むさし野の二階にあがり秋の風

月の夜にうかぶむさしのけものみち

武藏野に刺さるあかんぼ大の弾

武藏野のゲリラ豪雨に古道現る

むさし野や月に長尾を靡かせむ

武藏野は驛の後架に廿日月

武藏野を一步踏出す枯薄

吟行案内

九月二十四日（火）

吟行地その他未定ですが、予定に入れて下さい。

あとがき

阿部寒林先生から玉稿を戴いた。「これらの句は昨年10月入院し今年の7月までの句で……腰痛は去らず毎日がまんです。7月く心不全で衛生病院に緊急入院しました。8月に入り一歩も外へ出られません。八月五日」と書き添へられてゐる。句の背景は山好きの先生に相応しいかと東亜未さんの絵を使はせて頂いた。会員の方も毎月七句では力が余ってしまふことであらう、特別作品をいっお募集しておます。

「能登だより」今月で終了したのがちよつとさびしい。須賀敏子さんが今年能登に出掛けられたやうだが、機会を得て私も訪れてみたい。地図で見ると近くに「琴ヶ浜」があり鳴砂があると云ふ。「能登だより」は六回連載、七月号（五）とするところを（四）としてしまった。汗顔。

「獐回頭」の「断崖に白靴を脱いではならぬ」の高島茂

の鑑賞文は読ませる。映画の好きだった茂さんの頼みでよくビデオ録画をしたことを思ひ出した。名鑑賞文である。

（喜孝）

ご厚志多謝

田中藤穂様 森理和様

二〇一三年八月号

発行日	八月十七日
発行所	東京都中野区中央2,50,3
電話	090-9828-4244
ファックス	03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年

郵便振替 00130-655526（あを発行所）

乱丁・落丁お取替えます。